（本號十面）　（明治三十年五月一日郵便信書省認可）　明治二十六年五月廿八日　（定價金二錢）

時事新報

時事新報は全國中紙面の最も速き新聞紙なり

第三千六百六十八號
明治廿六年五月廿八日　日曜日
舊曆癸巳四月十三日　（乙、丑）
日出午前四時二十九分　入午後六時四十七分
月出午前四時四十四分　入午後四時四十七分
滿潮午前三時四十八分　午後四時十分
（西曆一千八百九十三年）

軍艦千鳴遭難者弔慰義金の始末

曩に千鳴艦沈沒の急報あるや本社は遭難者弔慰の爲め廣く義金を募集し總計金千六百四十八圓十六錢を得て之を日本海員援濟會に送り同會の募集したる義金と合せ遭難者弔慰の取計ひを依頼せしに今度同會は之を海軍大臣に送付して分配方を依頼し其顚末を通知し來りたれば左に掲げて義捐者諸君に報告す

拜啓帝國軍艦千鳴號遭難者弔慰義捐金募集の義に付ては先般來不一方御盡力被成下奉鳴謝候以御蔭總計金五千餘圓醵集相成候に付各遭難者弔慰方別紙甲號寫之通り海軍大臣へ出願候處別紙乙號之通り回答被申越候就ては右の要領貴社新聞紙へ御掲載被下該件の始末各義捐者へ御通示相成候樣致度別紙二通相添御挨拶旁此段得貴意候也

明治二十六年五月十九日　日本海員援濟會

時事新報社御中

（甲號）

昨年十一月三十日帝國軍艦千鳴號佛國より回航の途中伊豫國堀江沖に於て英國汽船ラヴェンナ號と衝突し同艦沈沒乘組員九十餘名溺死の凶報あるや朝野共に其不幸を悼まざるなく殊に本會の如き常に此海國に有用なる海員の養成準備に微力を致し海國の志氣を作興せんと期する者に在ては一層痛悼の情禁じ難く依て當時本會は日本郵船會社大坂商船會社東京海上保險株式會社及三菱社の同志と謀り右遭難者弔慰の爲め義捐金募集の擧を企て候處引續き報社日本新聞社報知社朝野新聞社中央新聞社三益社輸入自由新聞社やまと新聞社都新聞社朝報社の各新聞社に於ても共に此擧を贊成して發起に加はり弔慰金募集の廣告及義捐者の姓名金額の掲載方を無料に引受け廣く有志者の義捐金を募集致し候處其集金三千七百七十圓五十九錢一厘に相成此内各地方新聞廣告料等金二百四十四圓四十一錢八厘を差引金三千五百二十六圓十七錢三厘外に時事新報社募集の分金十六百四十八圓十六錢横濱貿易新聞社募集の分金十八圓九十八錢五厘各々本會に送付有之即ち總計金五千百九十三圓三十一錢八厘別冊の通差出候に付御手數之至に御坐候得共各義捐者の衷情御賢察の上遭難者弔慰の方法可然御取計被成下度別冊義捐者姓名及勘定書相添此段奉願上候也

明治廿六年五月十五日

日本海員援濟會々長　男爵赤松則良

海軍大臣伯爵西鄕從道殿

（別冊略ス）

（乙號）

昨年十一月帝國軍艦千鳴佛國より回航の途中伊豫和氣郡堀江村沖に於て英船ラヴェンナ號に衝突せられ同艦沈沒乘員九十名中七拾四名溺死するの凶變に際遭するや朝野共に其不幸を追悼し全國の有志者より續々義捐金を募集し以て愛傷の意を表せられ平生海員の養成を目的とし海國の志氣を作興するを期せられたる貴會に於ては一層緊縮の注意を表せられ日本郵船會社大坂商船會社東京海上保險會社及三菱社の有志諸君と相謀り遭難者弔慰の爲め義捐金の募集を企てられ此擧を贊成して發起に加はる旨報社、日本新聞社、報知社、朝野新聞社、東京横濱貿易新聞社、中央新聞社、國民新聞社、商況社、日就社、やまと新聞社、輸入自由新聞社、都新聞社、朝報社の各新聞社に於て弔慰金募集の廣告及各義捐者の姓名金額の掲載方を無料に引受け廣く有志者の義捐金を募集せられたる金額中各勉勞新聞の廣告料を差引金參千五百廿六圓拾七錢參厘外に時事新報社募集の分金千六百四拾八圓拾六錢及横濱貿易新聞社の募集の分金拾八圓九拾八錢五厘總計金五千百九拾參圓參拾壹錢八厘を貴會に送付し以て弔慰金の分配方を委托せらる貴會を初め前記各會社及各新聞社の盡力及義捐者諸君の厚情篤志能く筆紙の盡し得べき所にあらず依て玆に蕪辭を呈し以て感謝の微意を表す

追て各新聞社及各會社へは貴會より本文の旨趣可然御通報相成度且又御送付の金額は左の方法により分配の手續を爲すべし此段申添候也

明治二十六年五月十六日　伯爵西鄕從道

海員援濟會々長　男爵赤松則良殿

弔慰金分配方法

一、援濟會より送付の金額は遭難者の遺族（平等に分配する事

但佛人フランシエー　エノー氏より送付の金五十圓は特に指定せる所に從ひ淮士官以下の遺族に贈與すべし

二、遭難者の遺族は同姓の家族に限る事

但妻子、父、母、兄、弟、姉、妹を順を追ふて交付する事

三、各遺族へ交付するには其居住地の郡區長を經由して交付する事

四、各遺族より送付の領收證は本省に於て保管する事

五、分配に要する爲替料及新聞廣告料等は海軍將校及相當官の醵金に係る積立金中より仕拂ふ可し

六、分配期日は五月末日とす但分配濟新聞紙を以て廣告すべし

時事新報

海軍

兼て世人の待設けつゝありし海軍の改革はいよ〳〵發表したり頃日來の官報を見れば何々官制何々條例なる改正の條目頗る多く隨て將官以下の轉任等も少なからざるも我輩の所見を以てすれば其要點は詰り軍政と軍令とを區別したるに在りて他の改正は總て此區別より生じたるの結果なるが如し其區別に關する利害得失の論は兎も角もとして抑も今度の改革は去る二月政府の當局者が議會に對して政府全體の改革を歡約し就中海軍の事は最も着手を急にす可しと明言して乃ち海軍整理委員なるものを設け爾來怠慢なく取調に從事したる其結果なる可し從來海軍に對して世間に反對の物論少からざる其次第を聞くに自から種々の原因ある中にも其都内に一種いふ可らざる情實を傚はして隨て經濟上の始末にも自から不信用の廉ありと云ふが如き攻擊反對の集點にして海軍本來の規模組織如何に至ては假令ひ裏面に云々するも內實は第二の問題たるが如し左れば今度の結果は果して其物論の原因を掃除して他を滿足せしむるの效能ありや否や自から是れ他人の意志に存するみとなれば之を攝き變に寄に我輩の所見を述べんに抑も今の海軍の組織に於て局外者の眼にも不相應に見ゆる所のものは其事務に割合ひして規模の大に過ぐるに在るが如し海軍の役目は陸軍と共に國防の用を爲すものにして決して等閑に付す可らざるは無論ろの擴張の急務なるは我輩の宿論として一日も忘れざる所なれども其ふれを擴張するには自から方法順序なきを得ず我海軍が其創立以來幾多の年月を閲して漸く今日の發達を爲したる事實を見れば今後ふれを擴張して充分の域に達するには亦自から多少の年月を費さゝる可らず而して目下の實際如何を問ふに數を以て計ふれば軍艦三十餘隻（其中戰闘の用に供す可きものは廿餘隻なりと云ふ）噸數五萬餘噸に過ぎず誠に僅々たるものにして若しも船艦の數より云へば一の汽船會社にも及ばざるものと云ふ可し現に日本郵船會社の如き六十餘隻の船舶を所有すれども今の世界に於ける汽船會社の中にては左まで大なるものに非ずと云へば今の日本の海軍は一小會社の事と見ても可なる程のものなれども其規模に至りては儼然たる歐洲の海軍國と同樣の觀を呈し將官の數と云ひ鎭守府の設置と云ひ其他百般の組織、僅々三十何隻の軍艦を取扱ふ爲めには寧ろ過大なりと云はざるを得ず或は海軍の事務は會社の營業に異なり軍艦には兵器機械の設けもあり又戰爭の用意も必要にして汽船會社が商賣の目的を以て單に運送の用を辨ずるもの〻比に非ざれば其事務の如きも同日に論ず可らざるものあり可し我輩も素より其然るを認むるものなれども試に僅々卅餘隻の軍艦を維持運用して其用を爲さしむるに果して今の海軍の如き規模組織を要す可きや否や將た其規模組織は國家理財の點に於て果して當を得たるものなるや否やを觀察するときは之を西洋諸國の例に徵するも又ふれを我國情の實際に照すも我輩は適當の割合を算出するに苦しむものなり國家事業として海軍を擴張せんとするには軍艦も製造せざる可らず士官も養成せざる可らず何れも急の急なれども其事たるや直に着手して直に實を見る可きに非ず皆多少の歲月を要するものなるに未だ實際の實を見ざる其內より豫め後來の計畫を算して規模組織を大にするは喩へば會社の事業未だ盛ならざるに只將來の繁昌を卜して大に株金を募集し大に役員を任用するものに異ならず智者の事と云ふ可らず左れば今日に於ては現在の事務に相應して其規模を小にし其擴張進歩に隨て次第に之を大にするを適當の計畫にして今回の改革に就ては或は其邊の決斷もあるみとならんと竊に期したるに實際に其然るを見ざるは我輩の遺憾と爲る所なり

雜報

○電話事業に就て

去る二十三年の末政府が電話事業を東京市內に創めたる時には暗に加入を勸誘する位の勢なりしも今は東京横濱大坂神戸の各市に此の業を擴めて之を利用するもの續々增加し現に東京の加盟者は千百六十一名にして未だ機械の据付をなさゝる申込人は五百四十八名なりと云へども之は表面の話にして實際加盟を希望するものと既に交換局より機械据付の承諾を得たるものとを合して算ふれば千五六百名には上るべしといふ而して二十六年度の豫算に於て當局者の電話線架設に要する諸經費を見積りたる時の標準たりし新設箇數は七八百の間なりしも議會の遞信費を削減せし結果として新設箇數の豫算中百數十箇は勢、減少せざるべからず實に事業は豫算に倍加する速力を以て進まんとするも他の爲めに經費の支出を牽制せられて空しく其發達を引き止めざるべからずと雖とも斯る事相は獨り本年のみに限らざるべければ何れ相當の方案を設けざるべかずしも政府一手の事業としてこれを考ふれば他の事業との擴張のみを謀る事能はず廿七年度に於ける電話費を凡そ半減して豫算の從て其筋にては此の事業事として先づ師團所在の地との內議もある位なりと

○なぐさ

●小錦と大戸平　兩力士を合せし以來各地に於て昨年の五月場所に錦が勝再び勝を得、一回の勝越地方に赴きし本年の一月場園彌生館と横濱及水交社王子に於て大戸の勝ち夫院に興行し此の時は小錦赴きたれば兩勇勝ちを得五分〳〵の勝負たりされば角觝ふ當人より雙方を打たせて氣遣ひ居れるう東京はれろか近縣の好んと力瘤を腕に搾へるなの賭を爲し居る者も少なし賭けたる連中は同人が微勁せずと聞て內々心配す

●年寄八角の喜び　相撲師匠の梅ヶ谷を頭に戴き腸に席を占め西の方へ廻り海、大達、一ノ矢等に西の大關に進むと共に東西入本意を達して年寄仲間に社會に名望ありし同人の小結に昇進して三役に列され今猶在役中なるが今龍の兩力士が幕の內（上が利けて大に喜び居れる

●本場所後の花相撲　相撲場相撲を打上げ次第横濱の舊水交社構內に於て入此の三四年例と爲り土俵ある材料も同所（團ゐ移轉後庭園の鄙合に依りて興行する譯にも行かの土俵あれども興行場とし僅に公園一つ南へ越せばども也山手の客を呼ぶには石花相撲の興行地を探し

海（柏戸）若藤（上汐）等二谷）高砂、尾車、八角（大阿武ノ松（高見山）等の共力士は西ノ海、小錦、大天龍、谷ノ音、千年川、大出羽ノ海、鬼ヶ谷、今泉、櫻、平ノ戸、芳野山、大鹿毛、の二十七名あり是